



この冬はパレスチナの人々にとって大変に厳しいものでした。ガザでは、相変わらず人の出入りが厳しく制限されている上に、経済制裁によって生活は極端に悪化しました。レバノンでは夏の戦争の後遺症に苦しんでいます。それに加えて例年以上に寒い冬でした。

皆様のご協力により、今年は以下のような越冬支援を実施することができました。改めて感謝申し上げます。

# 越冬支援のご報告

## 教科書と学用品の配布

ガザ地区では、一月の小学校の新学期にあわせて、教科書と学用品を配布しました。昨年まで教科書は無償で配布されていたのですが、自治政府の資金が底をついたために教科書が有償になり、また教科書自体が不足するという教育の危機的な状況が起こっていました。しかも同じパレスチナ自治区といってもガザとヨルダン川西岸では状況が違い、自治政府の教育省に問い合わせても実態が分かりません。当会の石原エルサレム駐在員も12月に来日したマジダ・エルサッカさんも、状況がなかなか把握できずに苦労しましたが、ハン・ユニスのナワール・センターで600人以上の子どもたちに配布することができました。

## 農産物の買い上げと配布

ガザではまた農民組合の協力を得て、経済状態が最悪なために売れずに困っている農産物を買上げ、それを生活に困窮している世帯に配布することを実施しました。「貧者から貧者への贈物」と地元では呼んでいます。農産物はガザ各地の農家から買い集め、女性たちの協力で箱詰め作業をしました。配布先は、ガザ南部でイスラエルと境界を接していて現在も時折軍事侵攻が続いている地域です。大体10人家族の3週間分を約200世帯に配布しました。中身はジャガイモや野菜、オリーブオイル、麺類、卵、チーズなど日常の食卓に欠かせないものばかりです。

## 灯油の配布

レバノンでは、特に寒さの厳しい山間部に住むパレスチナ難民の100家族に、灯油を配布しました。つましく使えば一番寒い時期を乗り切れます。夏の戦争の後遺症は、社会的弱者である母子家庭や老人家庭を直撃しています。生計手段を失った人々が増え、これまであった親族間の助け合いなども難しくなっているのです。



家族支援のために、キャンペーンでは今年は刺しゅうなどの紹介と普及にも力を入れたいと考えています。来日したモナさんの家族は両親を亡くしたあと、お姉さんが刺しゅうの内職をして兄弟を育てたそうですが、レバノンでは難民キャンプに住む400人の女性たちがこの刺しゅう製作に参加しています。

ガザでは、アトファルナろう学校で難聴の女性たちの自立のために作られています。たくさんのベドウィンの女性たちも刺しゅうの内職に参加しています。パレスチナの刺しゅうには人々の生活と願いがこめられているのです。



(写真：国連)

## 下水処理施設の決壊による被災者への緊急支援

3月27日の朝、ガザ北部にある下水処理用浄化槽（ため池）の堤防が決壊し、汚水が付近に流れ出しました。この地域はイスラエルとの境界に近く、イスラエルの入植地が数年前までありました。入植地跡は現在「立ち入り禁止地帯」となっていますが、ため池とこの立ち入り禁止地帯に挟まれた小さな村に汚水が押し寄せました。村は大人の腰ほどの高さまで汚水につかり、2人の子どもと3人の女性が亡くなりました。負傷者が18人、壊れ家は100軒以上。水がなかなか引かず、伝染病の恐れがあったために250家族の1500人が村を離れて無人地帯に急遽作られたテント住まいになりました。

パレスチナ子どものキャンペーンでは、協同で越冬支援を実施した現地のNGOの農業委員会と被災者への食料提供にも参加し、同じくガザの農民から買い集めた農産物を340世帯に配布しました。

このため池は、30年以上前に当時の5万人の人口を基準に作られたもので、4倍以上になった現在の人口に対応できなくなり、周辺には別のため池が増設されていましたが、それでも追いつかなくなっていました。決壊のあとも汚水はなかなか引かず、ガザ中から排水ポンプをかき集め、それでも足りずにイスラエルからも排水ポンプが運び込まれました。新しくため池が掘られています、根本的な解決はとりにくい状況です。

2年前にイスラエルとの境界に沿って作られていた入植地から、イスラエル人入植者は撤退しましたが、その後

も立ち入り禁止地域として、パレスチナ人は住むことも利用することもできないままです。被災した村にはベドウィンと呼ばれる遊牧民の人たちが住んでいました。元々羊やヤギなどを移動しながら飼っていた人々ですが、占領や封鎖によって移動もままならなくなり、わずかに残された狭い土地に寄り添うように住んでいました。洪水によって住民は家財などを失い、今後の生活も大変です。子どもたちは教科書などもなくして、学校にも通えません。

ガザは、今年に入ってから政治的な混乱と経済封鎖が続いています。ファタハとハマースの連立内閣が作られたものの国際的な支援は進まず、社会の荒廃が目立っています。英国のBBC放送の特派員が誘拐された事件は1ヶ月経っても解決されておらず、外国人のジャーナリストは誰もいなくなっています。NGOのスタッフも安全が確保されないために、ガザに入りにくい状態です。当会のエルサレム駐在員も、今年になって2回ほどガザに入ったものの、その後は予定をしても現地側から「危険性が高いので今回は見合わせて」と警告されて断念しています。4月21日には再びミサイル攻撃も起こっています。

今回の事件は、占領が終わらないために基本的なインフラの整備もできず、加えて国際的な経済封鎖によってパレスチナ社会が混乱していることを象徴している人災といえるでしょう。250家族の行く末についても、汚水処理の今後についても、6月に40年になる軍事占領を一日も早く終結させることが、やはり根本的な解決の道だといえます。



トマト 800 キロ、 たまご 160 キロ、 チーズ 1 トン



(写真：国連)